【ポスターセッションの場合のみ記入 9pt 明朝・左端揃】

支援の「ズレ」に関する視覚障害者の意味づけとその対処方法

北星学園大学大学院博士後期課程　安達　朗子(009591)

キーワード：視覚障害者、支援の「ズレ」、ディスアビリティ

１．研 究 目 的

本研究は、視覚障害者が人生を通して受けてきた支援に「ズレ」を感じた際、どのようにそれを意味づけ、具体的にどのように対処してきたのか、また、「ズレ」を是正する際に生じる困難さの要因は何かを明らかにすることを目的とする。

2．研究の視点及び方法

視覚障害者は人生を通してさまざまな支援を受けることがあるが、視覚障害者が求めている支援と支援者が提供する支援内容や方法に「ズレ」が生じることがある。しかし、そのような出来事は視覚障害者にとって、複雑な気持ちを抱きながら個々に対処せざるを得ないことから、表面化されにくい。従来の視覚障害者をめぐる研究では、医学や心理学などにおいて、障害認識に焦点が当てられるものが多く(田島 2007:辻・大西 2012)、支援場面における個々の経験やそこで去来した気持ちは零れ落ちてきた。本研究は、これまでの障害のインペアメントに焦点を当てるものではなく、個人の人生から社会の在り方をも照射し、ディスアビリティを捉える視点で行う研究が必要であると考えた。そこで本研究は、視覚障害者を対象に、個人の語りから社会の様相を紐解くライフストーリー研究を基に、半構造化インタビューを行った。インタビューは5名に依頼し、約90分を目安に1～2回行った。分析は、逐語起こしを行い、類似性が多数見られたことから定性的コーディングにより質的機能的に分析を行った。

３．倫理的配慮

調査協力者には自由に参加を決定していただくこと、個人情報の保護、負担や不快への配慮、録音データの厳重な管理等を説明した。また、その旨を明示した同意書については、調査協力者の視覚障害に配慮し、インタビューの録音時に口頭でやりとりを行い、後日文字に起こすことによって、了承いただけたことを示した。なお、本調査については、2018年6月6日に開催された北星学園大学倫理審査委員会にて承認を得た(文書番号180研倫10号)。

４．研 究 結 果

本研究の結果、支援の「ズレ」は、進路、盲学校及び一般校の生活、就労、外出時において生じており、否定的感情を生起させたネガティブな「ズレ」と、思っても見ない支援に肯定的感情を生起させたポジティブな「ズレ」に大別された。

まずネガティブな「ズレ」は、調査協力者たちにより支援者側の「視覚障害者に関する無知」と意味づけられ、一方、ポジティブな「ズレ」は、めったにないこととして、「運による」ものと意味づけられていた。次に、ネガティブな「ズレ」に対して、調査協力者たちは「あきらめ」という対処方法を採っていたことがわかった。しかしそれは、必ずしも主体的な「あきらめ」ではなく、どうすることもできず「あきらめ」ざるを得ない状態にあったのである。そして、支援の「ズレ」を是正する際に生じる困難さの要因は、調査協力者たちが「自分自身」の説明不足や力不足と捉えられていることがわかった。このように「ズレ」を通して、調査協力者たちの内的世界では、こうした一連の循環がなされていることがわかった。

5. 考 察

本研究ではこの分析結果から、「ズレ」の自己責任化を個人モデルに依拠した認識と捉え、「ズレ」の意味づけにみる「視覚障害者に関する無知」が、いかに視覚障害者に対する抑圧として作用しているかを踏まえて、「あきらめ」という状態を社会モデルの視点によって捉え返し、以下５つのディスアビリティを指摘した。

1 つめは、盲学校教育におけるあんまという限定的な選択肢からみる情報提供不足及び経済的自立を迫る選択である。2 つめは、一般校の視覚障害者に対する基本的な学習環境の未整備である。3 つめは、就労における職場環境の未整備である。4 つめは、日常生活における支援の不均等さである。5 つ目は、存在の否定と肯定を左右する「ズレ」の影響力である。調査協力者たちは、「視覚障害者に関する無知」によって自尊心が傷つけられ、自信を奪われる場合があり、反対に、ポジティブな「ズレ」を通して安心感などの肯定的感情を抱く場合がある。両者の影響力を考慮すると、支援が「運による」という不公平なものではなく、「当然に分配されるべき支援」として意味づけられるほど、社会の常識が構築される必要があり、存在否定につながる「視覚障害者に関する無知」は是正されるべきディスアビリティである。

本研究の結果、各人の認識から、個人モデルと社会モデルが混在していることが示唆された。この内実を明らかにするためには、インペアメントとディスアビリティという二項対立的な社会モデルという図式にとどまらず、視覚障害者たちのより複雑な心理的葛藤をも捉えうる新たな視点によって分析を続ける必要があるが、それは今後の課題としたい。

【引用文献】

田島明子（2007)「障害受容」は一度したら不変か：視覚障害男性のライフストーリーから考える」『Core ethics』3, 409-419.

辻京子，大西美智恵（2012)「思春期に中途視覚障害となったA 氏のエンパワメントの軌跡」『日本保健福祉学会誌』18(2), 29-37.